

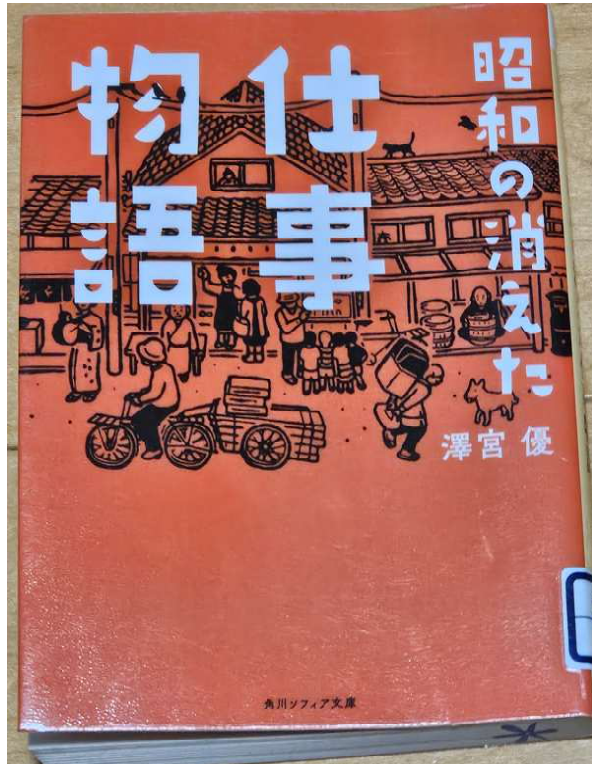
松村通信第 1 6 5 号

10 月 18 日
松村勝弘

餅系食堂

近況 近頃飲酒は、隔日にしている。そうするとわかったのは、飲む日は朝から嬉しい気分になるのです。毎日飲んでいたころは、そんなことはなかった。やっぱり飲むのが好きなんですね。

リタイヤしてからは、毎日オフィス通いです。読書を楽しんでいます。最近では、大学の図書を借りて読むのはもちろんですが、京都市の中央図書館でも借りて読んでいます。とりわけ専門書ではないけれど、読みたくなる本があれば、そこで借り出して読んでいます。



そんな本で、澤宮優『昭和の消えた仕事物語』（角川ソフィア文庫、2025 年）などという面白い本を借りて読むと、懐かしい話がいっぱいでした。「富山の薬売り」などという項を読むと

「行商の代表的なもの、主に置き薬が売られ、頭痛薬、腹薬、傷薬などの薬を各家に預けておき、一年に一度、在庫状況を見に来ていた。熊本県八代郡氷川町には秋の収穫後から師走

までよく来ていた。置き薬の箱を重ねて、大風呂敷に包んで持ってきた。薬売りの人たちは、手甲脚絆姿だった。

薬箱の薬の差し替えをして、毛筆で通い帳と薬箱の蓋に記帳し、使用した薬代を決済した。紙風船を土産に持ってきていた。使った分の金額を徴収する仕組みなのである。」などと書かれていて、そうだと、子供のころ紙風船をもらったことを思い出しました。

日経の WEB で紹介されていた本が、京都市図書館にありました。それが、奥井亜沙子『関西大衆食堂の社会史——「餅系食堂」からみた都市移動と立身出世』（法律文化社、2025 年）という本です。今回は、この本を中心に紹介したいと思います。私など、庶民の食堂（関東ではそばや、関西ではうどん屋といいます）で思い出するのは衣笠キャンパス時分大変お世



話になった美濃屋さんで、これが解体されると聞いて、時代を感じています。ここで食べた刻みきつねうどんが忘れられません。また、教授会が延びたとき出てくるのが美濃屋さんのうどんでした。今はそんなに長引く会議はないでしょうが、当時議論好きの人の不満「解消」のために、とことん議論されたものです。いわゆる「ガス抜き」なんですね。

餅系食堂 関西には、力餅食堂、大力餅食堂、弁慶餅食堂、相生餅食堂、千成餅食堂などという、いわゆる「餅系食堂」があります。子供のころ近所の「力餅」で「ビックリきつねうどん」を食べたのを思い出します。大学、それも衣笠キャンパスに近い竜安寺商店街には「相生餅」がありました。ここも時々行ったことがあります。それで読みたいと思ったのですが、幸い京都市図書館にありました。早速借り出して読んだ次第。

餅系食堂に住み込みに出てきた人の多くは、農家の家の継承ライン上にない次三男層であり、就業先を求めて都市に転出してきた。但馬地方の奈佐村出身の池口力造が明治中期に京都で再起をかけた力餅は、近代以降の京阪神都市社会の成長に乗って成功を収め、さしたる学歴切符を与えられなかった裸一貫の労働力型都市移動者に、頑張って修業に励めば「一国一城の主」になれるという「もう一つの立身出世」ルートを拓くことになったという（179頁）。ただ、最近は嗜好の変化、コンビニや「吉野家」「餃子の王将」「スカイラーク」「マクドナルド」のような多店舗展開する全国チェーンに圧されて、餅系食堂に陰りが見えているようです。



一応、章別編成をみておこう。

序 章 農村―都市移動から「家族の戦後体制」を読み直す

第1章 「もう一つの立身出世」ルートを拓く―但馬地方の労働力型都市移動

第2章 餅系食堂の暖簾分けと親方子方

第3章 大阪都市圏の発展と力餅組合の近代化路線

第4章 餅系食堂の日常と地域社会

第5章 繁栄の陰り

終 章 令和の餅系食堂

近代家族 この本を読んではじめて知ったのだが、「男は仕事」「女は家庭」という性別役割分業という家族の在り方が「近代家族」といわれていて、社会学の対象とされているようである。「近代化にともない拡大家族から核家族へと移行してきたと信じられてきたことが実はおお嘘だったということ」¹⁾を教えられた。産業化にともない、前近代の拡大家族から近代の核家族に移行してきたというもっともらしい説がこれまで受け入れられてきたが、必ずしもそうではないといわれるようになった。実のところ、近代家族・核家族は市場に労働力を提供するためのさまざまな責任と家族成員の情緒的満足の責任とを家族に負わせるためにこれらの装置が必要だったという²⁾。

実際はさまざまな家族のありようがあり、本書はその一例として力餅食堂における家族のありようを紹介しているという面がある。夫婦そろって店を切り盛りしているので、女将には家庭で子どもをみる余裕などない。「餅系食堂の家族における子育てと、戦後高度成長期に一般化したとされる近代家族のそれとの特筆すべき違いは、餅系食堂の子育てが家族内部に閉じていないという点である。職住一致の餅系家族の子どもたちは、地域の常連客に見守られ、地域の人々に面倒をみてもらいながら成長していった。経営主夫婦が『子どもはほったらかし』にできたのは、そこにある程度は――乳母車に赤ん坊を乗せて店の前に置いておいても心配ではない程度には――頼ることのできる地域社会が存在したからである。地域社会に包摂され、地域ぐるみで子どもたちが育まれてきた」（182頁）という。

飲食系自営業 前回紹介した橋本健二『新しい階級社会』では、資本家階級、新中間階級、正規労働者階級、アンダークラス、旧中間階級があるとされていたが、旧中間階級を象徴するものとして自営業者が挙げられていた

が、餅系食堂はまさにこれに含まれる。かつては自営業といえば、農林漁業が圧倒的であった。とりわけ、第二次大戦直後は都会は空襲で疲弊しており、地方の農林漁業就業者数は増加していた。しかし、地方に多くの人口を抱える余地は少なく、とりわけ農家の次三男層は、都会の産業が復興する中で、都会に流入した。その際、地方出身者は近代産業の人気業種には都会周辺の人々がいわば先取りするので、地方出身者はあまり好まれない業種に就業せざるを得なかった。そのなかで、但馬出身者は同郷ネットワークを活用して、餅系食堂に就業し、そこで修業を積んで独立するという見通しを持つことができた。そこで修業を積み暖簾分けをしてもらえる。そして次々と同系の食堂が京都、大阪、神戸と広がっていった。著者はアンケートやインタビュー調査により、その展開の様子を描写している。



図1-4 但馬内旧町

堂にたどりついていることがわかる。そこは貧しい山村地域であり、生活もきびしいし親方子方の系列もきびしく守られていた地域であった。だから食堂での厳しい修業にも堪えられたのであった。学歴エリートでもないそうした地域の人たちの「もう一つの立身出世」の道として餅系食堂での暖簾分けがあったわけだ。次三男層だけではなく、貧しかった長男ですら、この道に進んだ人もいたという。こうした「餅系食堂に出てきた北但馬出身者は、ホワイトカラーならぬ白い調理着に身を包み、近代以降の京阪神都市社会の発展を支えたブルーカラー（菜っ葉服）労働者の『胃袋』を支えていくことになる」（62 頁）。うまい表現である。

餅系食堂の暖簾分け 住み込み修業はきびし

かった。「住込み従業員は店舗の二階や別棟で寝食を共にするが、『六畳一間に五人』など住環境はなかなか厳しいものであった。」1951（昭和26）年に入職した人は、「当時を『過酷なんてもんじゃなかった』と振り返る。『八畳の部屋に八人。クーラーも扇風機もない。腹巻きだけして、うちわだけ。体中汗疹だらけ。仕事の時も厨房はまあ熱い。ほんとにたまらん。』（73 頁）これに堪えられる貧しい出身だった。

表2-1 開業資金の調達方法

調達方法		N	%	
親方	銀行保証人になる	13	44.8	75.8
	資金の直接貸付	7	24.1	
	取引先企業融資の保証人になる	2	6.9	
親族	親兄弟	12	41.4	48.3
	その他親戚	2	6.9	
力餅ローン（大阪組合のみ）		4	13.8	
自己資金		5	17.2	
その他		1	3.4	
合計		46	156.6	

注1：複数回答。初代経営主29名を100%とする。

注2：「その他」は配偶者の親族の援助。

暖簾分けに当たっては、表2-1にみられるように親方の経済援助があり（75.8%）、独立開業の日には力餅グループからの助力も得られた（82.83 頁）。大阪力餅グループでは独自のローンも得ることができた。

「親方が転出先の都市において『親以上に親』であれば、『同じ釜の飯を食った』兄弟弟子とは、『親戚以上に濃い』付き合いになることも珍しくない。暖簾分けの系譜に基づく親方を中心とした兄弟弟子との関係性は、経営主にとって最も基本的なタテのネットワークであった」（91 頁）という。

繁栄の陰りから令和へ 近年餅系食堂を取り巻く環境は厳しさを増してきた。外食産業が勢いを増してきたのとはうらはらに、餅系食堂は、時代に取り残されてきたように思われる。巷にはファミリーレストランのチェーン、ケンタッキーフライドチキン、さらにコンビニが弁当を売り出し、顧客の嗜好の変化から



取り残されつつある。そこへ左図に見られるように、コロナ禍で外食産

業の市場規模が一気に縮小した。そば・うどん店の市場規模は 2019 年の 1.31 兆円から 2020 年の 0.96 兆円へと 2 割以上の落ち込みであった³⁾。

高卒が一般化し地方の卒業生も餅系食堂の従業員になろうとする人はいなくなってきた。おまけに暖簾分けですら新規出店は困難になってきている。

餅系食堂の子弟ですら学歴を身につけ後継ぎとしない。そんな中でも、跡継ぎとして店舗やメニューを一新して、地域活性化に取り組む後継者も出てきている。店舗をリニューアルして屋号を「力餅」から「うどん製麺所〜業〜相川本店」と変更したケース、「あんバターサンド」を開発した「百万遍大力餅」のケース、「深草大力餅」から「古本&読書カフェ 大力餅」として両親の店をクラウドファンディングで復活させた事例、姫路での市民会館ちから（力餅）から「ちから Cafe」として経営主の息子の同級生でパートとして手伝いにきていた女性による継承のケースなどが紹介されている。

近代家族再考 「男は仕事」「女は家庭」という性別役割分業という家族の在り方が「近代家族」であり、それは核家族であり、専業主婦がある種の女性の「理想」であるように言われていた。その専業主婦は子どもを愛おしみ育てることが望まれていた。性別役割分業を近代家族の不可欠の特徴とするかは議論の余地があるという。さらに、近代家族においては、形態や役割だけでなく、「感情」も規範化されたことが重要であるという。母性愛という言葉が典型であるが、親は子に対して「自然と」愛情が湧くはずであり、好きになって結婚した夫婦は一生愛情が続くはずであるともいう。家族であれば愛情が存在し、そして、愛情があれば家族はうまく行くという考え方が広まったという⁴⁾。そして、近代家族において、子どもは、存在自体において愛情を注がれるべき、「特別な期間にある者」とみなされ、教育（社会化）に両親の力が注がれる、という⁵⁾。いわゆる「子ども中心主義」である。

以上からわかることは、餅系食堂の子どもたちに対して母親が十分に手をかけられたとは思われないだろう。とりわけ戦後においては、両親とも子どもの教育に対して忸怩たる思いを抱いていたことが奥井の著書の随所から読み取れる。それでも前述したように、子どもをほったらかしにしている、常連客や

地域が見守っていた。同じことは、かつての農家をはじめとする自営業者の子育ては多かれ少なかれ同様であったと見ることができる。共働きにおいて、それはやむを得ないのであった。それでも地域がしっかりしていたから地域の誰かの目が子どもたちに注がれていたというべきであろう。

地域社会・コミュニティ 近年共働き家庭が増えてきている。保育所問題がしばしば話題になる。保育園では子どもが病気になると預かってくれない。やむを得ず、病児保育へ送り届ける。病気にならなくても、親同士で子どもを預からなくてはならない時がある。そんな親しい人が必要になる。学童保育というものもある。我が孫も学童保育に通っていたことがある。小学校が終わり、学童保育へ自分一人で行けるよう教えた。それで自分で通っていたが、近所のおばさんが心配になって、後をつけていったらちゃんと学童保育の場所へ行ったという。これなど地域がしっかりしているからできることである。どこでもそうとはかぎらないだろう。これからますます、共働き家庭が増えていくだろう。子どもを地域で温かく見守ることがますます必要になるだろう。

未婚率の高まりや経済的理由その他で近代家族を形成できない人々が増えてきている。これはこれで新しい問題ではある。別の機会に考えてみたい。

- 1) 長谷川みゆき「Essay:近代家族というフィクション」(『千葉大学人分社化医科学研究所研究プロジェクト報告書』33 頁。)
- 2) 同上、36 頁。
- 3) これらは、日本フードサービス協会のサイト (https://www.jfnet.or.jp/industry_report/) にある「市場動向調査」にアップされているデータからとったものである。
- 4) 山田昌弘「日本家族のこれから―社会の構造転換が日本家族に与えたインパクト―」『社会学評論』64 巻 4 号、2013 年、652 頁。
- 5) 「社会学のすゝめ第 35 回「現代の〈家族〉の行方（前篇）―近代家族という『形』」『JMA リサーチ道場』(<http://blog.jma-net.jp/article/407975971.html>)。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。

皆様のご意見を歓迎します。HP (<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。フェイスブックもやっています。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい (matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。